

研究論文

地域高齢者との福祉体験学習の教育効果と 地域貢献事業としての評価

中江弘美¹⁾ 日野出大輔¹⁾ 藪内さつき¹⁾ 竹内祐子¹⁾ 吉岡昌美¹⁾ 伊賀弘起¹⁾

中野雅徳¹⁾ 吉田秀夫¹⁾ 尾崎和美¹⁾ 羽田勝¹⁾ 河野文昭²⁾ 吉本勝彦³⁾

¹⁾ 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部口腔保健学講座

²⁾ 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部健康長寿歯科学講座

³⁾ 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部摂食機能制御学講座

要約：本研究の目的は、地域高齢者との福祉体験学習における学生への教育効果と、地域貢献事業としての評価をすることである。徳島大学歯学部では、医療人を志すものとしての自覚を持つことを目的とした取り組みを県内16カ所の施設で合計28回実施した。これは、学生が口腔保健指導「お口の健康長寿教室」において、高齢者を対象とした口腔機能訓練の補助者として体験学習するものである。学習後のレポートから、到達目標とした地域貢献の在り方や歯科専門職としての役割を認識する学生が多くを占めた。一方、地域貢献事業として評価するため、参加職員への調査を行った結果、利用者への役立ちに加え、多くの施設職員の理解も深まったとのアンケート結果が得られた。以上から、本取り組みは学生への教育目標「医療人としての自覚を持つ」に沿った成果が得られており、また、施設職員の口腔機能向上プログラムへの理解の深まりから、今後の継続が期待される。

(キーワード：体験学習, 教育効果, 地域貢献)

Educational effects by the welfare-experience learning program with aged people in community, and its evaluation as regional contribution.

Hiromi NAKAE¹⁾ Daisuke HINODE¹⁾ Satsuki YABUUCHI¹⁾ Yuko TAKEUCHI¹⁾ Masami YOSHIOKA¹⁾

Hiroki IGA¹⁾ Masanori NAKANO¹⁾ Hideo YOSHIDA¹⁾ Kazumi OZAKI¹⁾ Masaru HADA¹⁾

Fumiaki KAWANO²⁾ Katsuhiko YOSHIMOTO³⁾

¹⁾ Subdivision of Oral Health and Welfare, The University of Tokushima Graduate School

²⁾ Subdivision of Oral Health Science, The University of Tokushima Graduate School

³⁾ Subdivision of Stomatology, The University of Tokushima Graduate School

Abstract : The purpose of this study is to evaluate the educational effect by the welfare-experience learning program with aged people in community, and to evaluate this program as the regional contribution. This program is to aim at having a consciousness of becoming the dental professional in the University of Tokushima, Faculty of Dentistry, and they were carried out with 16 institutions (a total of 28 times). This program makes students accompany the oral health guidance "long-life oral healthy classroom", and they carried out the experience study as an auxiliary person of the various functional oral-training for elderly people. By the investigation of the student's report, there are students who recognized the achievement objectives which are roles of the way concerning regional contribution as dental professionals in community. On the other hand, the questionnaire to the participating personnel was conducted in order to evaluate this program as the regional contribution. As a result, this program is useful to elderly people and the understanding of institution personnel is also deepened this practice.

As mentioned above, the result of having is suitable for the educational goal "to have a consciousness of becoming the dental professional". Furthermore, this program was considered that future continuation is also expected by deepening of an understanding to the personnel's functional oral-training program.

(Key words: experience learning, regional contribution, educational effects)

1. はじめに

急速に高齢化が進む現代社会の中で、健康な歯・口腔の保持増進は、全身の健康にかかせないものであり、高齢者のQOLの向上に繋がるとされている。特に、要介護高齢者への器質的口腔ケア(専門家による口腔清掃)による介入によって、

誤嚥性肺炎の予防が可能であるとの報告¹⁾以降、多くの病院や高齢者施設などで積極的な器質的口腔ケアが実施されている。最近では、摂食・嚥下障害の改善や予防の観点から、特定高齢者集団への機能的口腔ケア(口腔機能向上のための機能訓練)による介入により、反復唾液嚥下テストでの嚥下

回数の上昇や口唇閉鎖力、パタカの発音回数、舌突出長さ、頬の膨らまし、ガム咀嚼力などに改善が見られ、口腔機能訓練が高齢者の摂食・嚥下機能、構音機能をはじめとした口腔機能の維持・増進に有効であるという報告がある^{2),3)}。

このように高齢社会を担う歯科医療従事者を目指す学生教育においては、高齢者の健康長寿に口腔保健の専門的立場から貢献できる人材の育成が望まれる。吉岡ら⁴⁾は、チーム医療体験学習による実践的キャリア形成支援教育プログラムから、チーム医療の現状とその意義を身をもって体験させることが、専門分野に対する学習意欲を高める教育効果を生み出すことを示している。また、高塚⁵⁾は、高齢者の身体的・精神的特徴の理解だけでなく、コミュニケーション能力に優れた人材を育成すべく、医療系学生教育に高齢者との交流学習を導入し、学生が将来臨床において、患者や同僚に温かいまなざしで関わり、他者に安心感や信頼が得られる望ましい態度や行動ができる全人的医療の実現のための礎となると述べている。更に中村⁶⁾は、医療系学生へ学外体験学習を実施した評価から、「人間の理解は、人々と交わりながら深められる。ゆえに、人間中心の医療観、健康観を獲得するためにも、学外体験学習は意味がある」と考察している。

本学歯学部では、入学早期からのコミュニケーション演習および医療人としての自覚と人間力の向上をめざし、地域に根ざす口腔保健・高齢者福祉の重要性を体得することを目的とした授業を、平成19年度徳島大学パイロット事業支援プログラム⁷⁾として開始した。これは、平成20年度からの質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)「高齢社会を担う地域育成型歯学教育」の取り組み⁸⁾として、現在まで継続して実施している(表1)。本取り組みのうち、徳島大学歯学部1年生を対象とした養護老人ホームにおける、高齢者との1対1の交流「高齢者交流学習」については、学生の学習記録や自己評価点数の変化について考察し、「コミュニケーション力」、「人間力の向上」など、授業の教育効果について報告した⁹⁾。今回、我々が行っている、教育GPの授業のうち、特に地域福祉体験学習授業の内容を紹介するとともに、その教育

効果を検証し、また、地域貢献事業としての評価について考察したので報告する。

表1 教育GP取り組み概要(入学~2年前期)

時期	授業の場	内容
1年前期	学内授業	食と健康学習
		相互歯磨き学習
		気づきの体験学習
1年後期	学内授業	特別講義 〔「生と死」「老い」に 関する講話など〕
	学外体験学習	高齢者交流学習
2年前期	学外体験学習	地域福祉体験学習 「お口の健康長寿教室」

2. 対象および方法

1) 対象

(1) 対象学生

平成21年4月から平成22年7月までに、地域福祉体験学習を受講した徳島大学歯学部歯学科(歯科医師養成課程)および口腔保健学科(歯科衛生士養成課程)の2年生(平成21年度50名、平成22年度51名)である。

(2) 対象施設

地域福祉体験学習を実施した16施設の内訳を表2に示す。各施設の対象者は、15名~40名であった。

表2 実習施設の内訳

施設の種類	施設数
デイサービスセンター	8ヶ所
市町村の介護予防教室	3ヶ所
グループホーム	2ヶ所
特別養護老人ホーム	1ヶ所
介護老人保健施設	1ヶ所
地域活動支援センター	1ヶ所

2) 方法

(1)教育GP取り組みの教育目標と教育管理ネットワークシステム

教育GP取り組みの教育目標を図1に示す。高齢者交流学习では「人間力を向上させる」ことを一般目標とし、1~4の内容を到達目標とした⁹⁾。地域福祉体験学習では一般目標「医療人を志すものとしての自覚を持つ」を達成するため、6つの到達目標のうち「5. 口腔保健・福祉を原点とした地域貢献のあり方を述べる」、「6. QOL向上における歯科専門職としての役割を説明する」の2項目をその到達目標とした。

<一般目標>

1. 人間力を向上させる。
2. 医療人を志すものとしての自覚を持つ。

<到達目標>

1. 基本的マナーを守る。
2. コミュニケーション力を養う。
3. ホスピタリティ・マインドをもって対応する。
4. 相手を受容して適切に行動する。
5. 口腔保健・福祉を原点とした地域貢献のあり方を述べる。
6. QOL向上における歯科専門職としての役割を説明する。

図1 教育GP取り組みの教育目標



図2 徳島大学歯学部教育GPホームページ

また、徳島大学歯学部教育GPホームページ(図2)内のウェブサイトからのアクセスにより、実習前に施設の情報を確認し、実習後、学生は迅速に学習記録(レポート)を提出し、更に担当の施設関係者から、個々の学生レポートへのコメントをいただくことができる教育管理ネットワークシステム「エデュネット」を構築、運用した。図3にその運用手順を、図4にその概要を示す。

歯学部教育管理システム「エデュネット」は、歯学部教員、教務係、学生、実習先をウェブシステムでつなぎ、レポートの依頼、提出、採点などを迅速に対応するシステムである。

教務係

1. 学生のIDとパスワードの登録
2. 実習施設の登録・IDとパスワードの登録
3. 教員の登録・IDとパスワードの登録

学生

1. 学生は、教務係よりIDとパスワードを発行される。
2. ログインし、実習施設情報閲覧・実習施設職員や教員に対し、実習目標を提示する。
3. 実習終了後、レポートを完成させ送信する。
4. 送信済みレポートのコメント閲覧(実習施設・教員)

実習施設

1. 教務係より、IDとパスワードを発行される。
2. ログインし、実習に参加する予定の学生のプロフィールを閲覧(実習に必要な生年月日等の個人情報は閲覧できない)
3. ログインし、学生のレポートを閲覧
4. コメントの入力・送信

教員

1. ログインし、実習施設・学生の閲覧
2. 実習終了後のレポート雛形作成
3. 学生へのレポート設定
4. 送信済みレポートの閲覧
5. レポートへのコメント入力・送信
6. 実習先への送信済みレポートの公開チェック

図3 エデュネットの運用手順

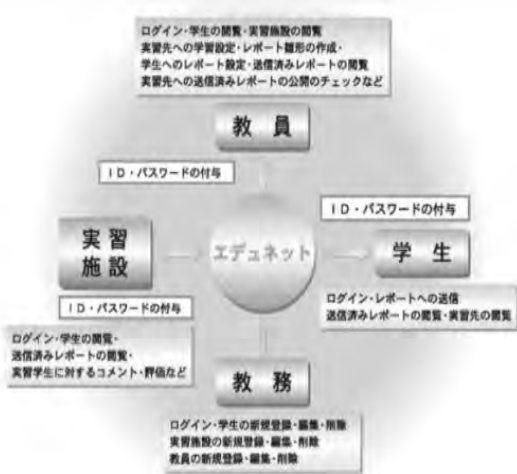


図4 教育管理ネットワークシステム「エデュネット」の概要

(2) 地域福祉体験学習プログラムの内容

2年前期に、地域福祉体験学習「お口の健康長寿教室」を県内16カ所の施設で計28回実施した。参加学生3~4名を1グループとし、介護保険サービスを利用している要支援・要介護者や特定高齢者に対して、歯科医師による講話と歯科衛生士による歯科保健指導の実践現場を見学し、補助を行った(図5,表3)。特に、口腔機能向上を目指した現場の取り組みを補助・体験することにより、口腔機能の保持・増進が高齢者の生活の質を高め、介護予防の役割を果たす意義を学ぶことを目的としている。

実習の事前学習として、体験学習予定日の1週間前に放課後を利用し、教員と学生で実習打ち合わせを行った。(図6)

表3 当日のプログラム内容とタイムテーブル

9:00	大学出発
9:30	施設到着 学生による対象者のアセスメント
10:00	歯科医師教員により、口腔に関する広い視点に立った講話を行い、歯・口の健康の大切さを認識し、口腔領域への関心を高める。
10:30	歯科衛生士教員より、口腔機能向上のための健口体操や間接訓練のデモンストレーション及び保健指導を行う。 学生は、講話・健口体操・保健指導の見学や補助・レクリエーションを行う。
11:30	実習終了 帰学

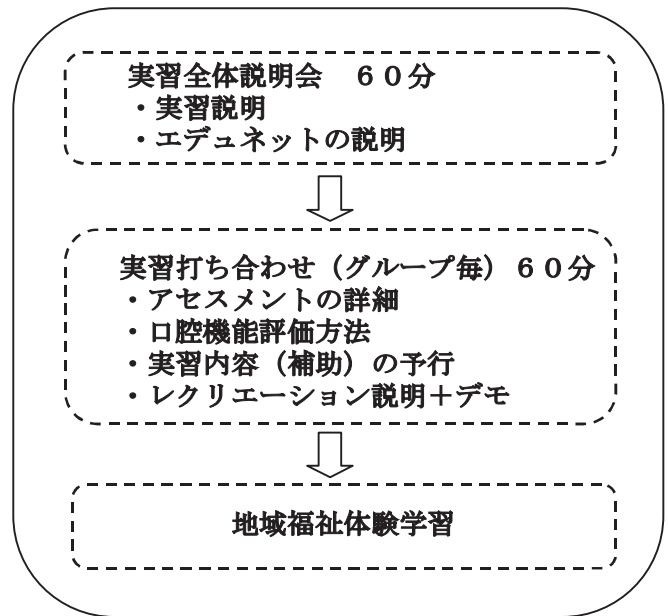


図6 事前学習を含む実施計画



図5 地域福祉体験学習の様子

(3) 教育効果の評価

実習終了後、学生が、「エデュネット」を利用して提出した学習記録(レポート)の中で、「口腔機能訓練の見学や補助に参加して、感じたこと、気づいたこと、学んだこと」のテーマで各個人が記載した内容(表現)を抽出し、先に示した1~6の到達目標別に分類し、教育効果の評価に用いた。

実習の学びを深める為には、体験をふり振り返りに残すことが重要であると考えられる。記録す

ることにより実習での学びが明確化され、その過程から新たな気づき生まれ、実習を客観的に考察する機会となる。このような観点から参加して、「感じたこと、気づいたこと、学んだこと」のテーマでの学生レポート内容を、実習での学びの深さやふり返りの深さを Kolb らによって提示する「経験学習のサイクル」を参考に、以下のように分類して考察した^{10),11)}。

- ①体験の描写のみにとどまる。
- ②体験の感想にとどまる。
- ③体験をもとに気づきがあり一般化できている。
- ④今後の具体的な行動を提示している。

(4) 地域貢献に関する調査

実習施設職員へのアンケート調査から、地域福祉体験学習の教育効果と地域貢献事業としての評価を検討した。質問項目を図7に示す。

1. 年齢と性別を教えてください。
2. あなたの職種を教えてください。
3. 口腔機能向上をテーマに実習を行いましたがいかがでしたか。
4. 職員の理解は深まりましたか。
5. この実習は利用者役に役立っていると思いますか。
6. 実際に口腔機能向上につながることを行っていますか。
7. 地域への働き掛けは重要であると思いますか。
8. 実習を地域の中で積極的に取り組んでほしいと思いますか。

図7 地域福祉体験学習に関するアンケート調査

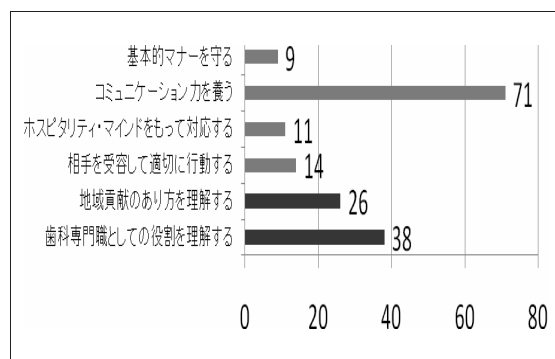
実習終了後、実習施設職員にアンケートを無記名方式で行い、後日、代表者を通じて回収した。回答形式は、「はい」「どちらかといえばはい」「どちらでもない」「いいえ」「どちらかといえばいいえ」のうちから、単一選択方式で行った。

なお、実習施設職員には、倫理的に十分配慮した上で、今後の取り組みの改善に役立てることを周知しアンケートを実施した。

3. 結果および考察

1) 教育効果について

地域福祉体験学習に参加した学生(101名)のレポートから、到達目標に対する教育効果について考察した。図8に示すように「5. 地域貢献の在り方」に該当する内容は、26名の学生に認められ、その例として『高齢者の口腔に関する関心の高さを感じることができた』、『口腔ケアの重要性を伝えること』などの記載があった。「6. 歯科専門職としての役割を説明する」に該当する内容は『高齢者にとって、口腔の健康はQOLを高めることに繋がる』、『口腔機能の向上が重要である』などが、およそ3分の1の学生に認められた(図8)。その他の意見としては、「2. コミュニケーション力を養う」ことに関する記載が71名と非常に多く、多くの学生が利用者への対応に重点を置き、コミュニケーションの大切さを認識したと思われる。体験型学習において、長宗ら¹²⁾は乳幼児との継続的交流学習を組み入れた体験型コミュニケーション授業は学生の意識・行動変容に有効であり、異世代間交流の乏しい社会においては、学びの場のひとつとして、このような授業の必要性が高いと述べ、コミュニケーション体験の効果と重要性を指示している。我々の体験学習でも、学習記録(レポート)の内容から、アセスメントを取ること、コミュニケーションの難しさや、ラポールの形成がいかに重要であるかなど、対人援助の難しさに直面している学生も36名存在することが分かった。



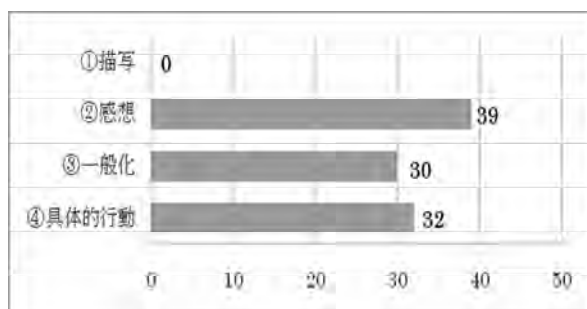
(人)

図8 学生の各到達目標に対する記載内容の見た学生の数(複数回答あり)

施設担当者からは、エデュネットを通じ、学生のレポートに対して『積極的に施設利用者との関わりを持とうとする意欲が伝わってきた』、『医療、福祉の現場での活躍を期待する』など、授業目標に対する後押しコメントを多く頂いた。また、『講義で学んだように、病院には通っても、口腔内にまで気が回らずに、入れ歯が合わないとか、口腔機能に問題を抱えながらも放置したままになっていることが多いことがわかった』という学生に対して、さらに詳しい高齢者の実情を説明していただいたケースもあった。このように個々の学生に対して頂いたアドバイスは、学生にとって、大変貴重なものであり、今後の実習への課題となったようである。今回、エデュネットを用いたレポート提出システムの活用により、学生、教員、研修先との連絡が迅速にでき、教員と学生の距離感が縮まったことがうかがえた。

「エデュネット」については、今後より一層情報の共有化を目指し、お知らせ機能や緊急時の学生向けメールマガジン配信機能などを搭載するよう考えている。ダイレクトに学生に情報を発信するルートを構築し、教育方針についてのアンケートなどの意見をもらい、素早く授業にフィードバックするなど、教える側と教えられる側の双方にとって有効な使い方を開発していく予定である。

今回の実習での各学生の学びの深さを分類した結果を図9に示す。



(人)

図9 各学生のレポート内容より分類した学びの深さ

学生のレポート内容から、39名の学生は感想にとどまったものの、30名の学生は、実習体験からの気づきを一般化し、さらに32名の学生は今後の

具体的行動を提示している。

このように、本体験学習においてもおよそ3分の2の学生が、実習での体験をもとに気づき、考えることができ、その約半数の学生では、今後どのように活かし、次にどのような行動をとるのかというところまで、学生は体験を通して、学びを深めていくことができたと考えられた。

ところで、Deweyの提唱する「経験主義」に基づく考え方を引き継ぎ、より構造的に「経験学習」のあり方を研究したKolb¹⁰⁾によれば、学習を一つの連続体と捉え、そのプロセスを①具体的経験、②反省的観察、③抽象的概念化、④能動的実験の4つの学習モードから説明している¹³⁾。また、宮田¹¹⁾は、「物事を経験してもその経験を振り返ることがなければ、それは単なる経験に終わってしまい、その経験の持つ学習の潜在的可能性を引き出すことができない。経験をじっくりと振り返り、そこから次の機会に適用できる抽象的概念を得るといふ、経験学習のサイクルを重ねていくことが、成長には不可欠である」と述べている。これらのことは、今回の実習においても該当すると考えられた。例えば、学生の学びの一例として、学生が地域の高齢者施設での実習を体験し、「高齢者は、口腔の健康について関心が高いという実態を知る」そして、交流を振り返ることにより、「歯科医療従事者は、歯科治療を行うだけでなく、口腔の健康の保持にかかわっていく必要があること」に気づく。そして、多くの学生が歯科医療従事者としての地域貢献の在り方を理解することへと繋がっていた。

中村⁶⁾は、「一人の無印の人間として、多くの人と交わる自分自身を素材にしながら、充分思索する機会を持たなければならない。この過程を体験的に理解すれば、自分と同じように一人の人間として感じ、目の前の人をそのまま理解したいと思えるだろう」と述べている。学びを振り返ることは、今の自分の学びのレベルを知り、次のステップに繋げるという重要な役割があるのではないだろうか。

2) 地域貢献について

地域貢献事業として評価するために、本取り組みに参加して頂いた施設職員(9施設52人対象)

へアンケート調査 (図7) を行った結果を図10に示す。回答者は男性34%, 女性53%, 未記入13%で、年齢は20歳代21%, 30歳代30%, 40歳代21%, 50歳代24%, 60歳代4%と20歳代から60歳代と幅広い年代であった。また回答者の職種では、77%が介護職、次いで、看護師9%, 生活相談員6%, 理学療法士・管理者・ケアマネージャー・調理員がそれぞれ2%であった。

「3. 実習内容はよいか」という質問に対し「はい」88%, 「どちらかといえばはい」12%と、内容については高い評価を得た。「4. 職員の理解は深まったか」については、「はい」63%, 「どちらかといえばはい」23%, 「どちらでもない」14%と、おおむね職員の理解が深まったと思われる。「5. 施設利用者に役に立ったか」については、「はい」65%, 「どちらかといえばはい」25%, 「どちらでもない」4%, 「どちらかといえばいいえ」6%と、おおむね役に立ったと思われるが、少数ではあるが否定的な意見もあった。「6. 口腔機能向上のプログラムを行っている」については、「はい」64%, 「いいえ」36%と、6割の施設は、取り組んでいる。中には、実習終了後から取り組んでいるという意見も見られた。「7. 地域への働きかけは重要である

る」については、「はい」83%, 「どちらかといえばはい」17%と、地域への働きかけが重要であることが示された。「8. 実習を地域の中で積極的に取り組んでほしい」については、「はい」77%, 「どちらかといえばはい」19%, 「どちらでもない」4%と、全体に地域の中での取り組みを期待している声が多かった。質問3~5の実習内容や現場の理解, 質問6~8の地域での働き掛けや取り組みについては、利用者に口腔機能への理解が深まり、多くの施設職員の理解や口腔機能への関心が高まったとのアンケート結果が得られた。具体的には、『職員も頭の中だけではなく実際に理解できました』, 『専門職のアドバイスは大変参考になりました』, 『専門職のアドバイスは大変参考になりました』など、口腔機能向上プログラムの理解や今後の継続も期待される内容であった。

先にも述べたように参加職員への調査から、利用者への支援効果が期待される。しかし、参加高齢者への直接的なアンケートや、機能評価を実施していないため、今後の調査が必要である。また、一部の自治体との間で、本取り組みを通じた口腔保健・福祉の連携が実践できたことから、地域貢献事業としての役割を果たしたと考えられた。

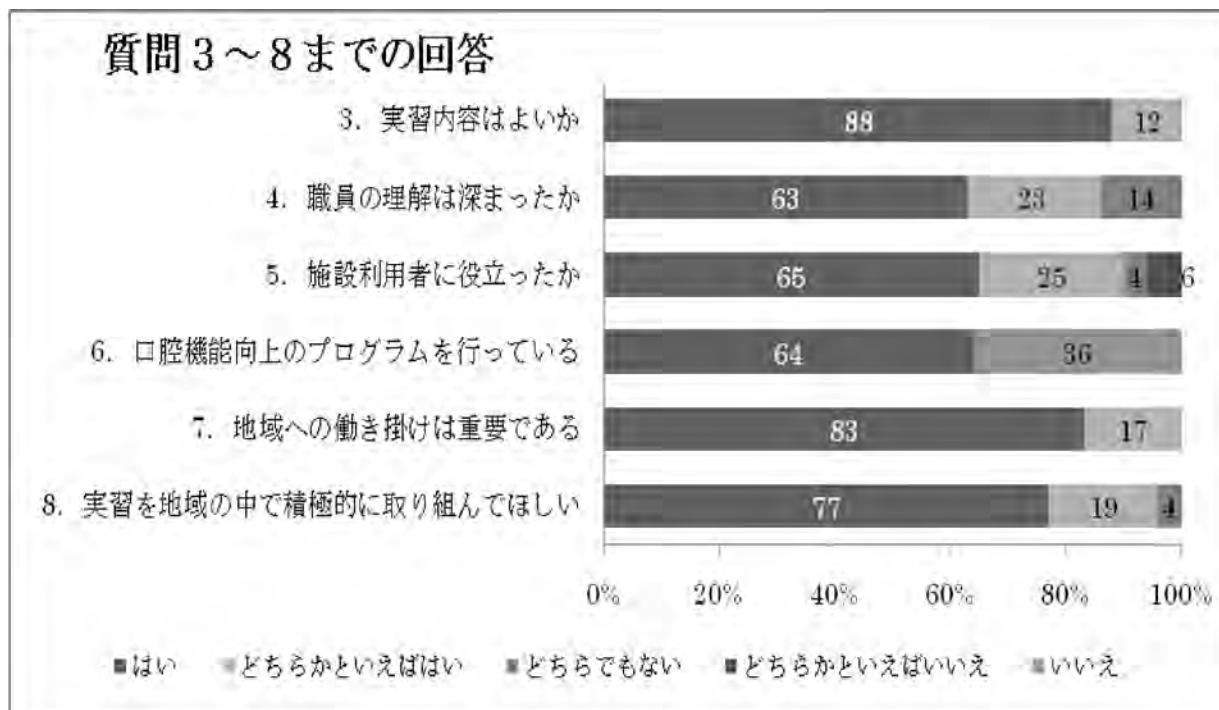


図10 取り組みを実施した施設職員へのアンケート結果

4. 結論

地域高齢者との福祉体験学習による取り組みは教育目標「医療人としての自覚を持つ」の2つの到達目標に対する学生への教育効果に沿った成果が得られている。また、各学生の学びの深さの調査から、多くの学生は描写や感想のみに留まらず、実習体験からの気づきを一般化し、全体の約3分の1の学生は今後の具体的行動を提示するなど深い学びが体験できていた。

一方、職員の口腔機能向上プログラムへの理解が深まり、今後の継続を期待する声も多いことから、地域高齢者との体験学習は今後さらに、地域福祉現場との連携を深めながら、地域貢献の役割を果たすものと考えられた。

以上から、地域福祉体験学習「お口の健康長寿教室」は、目標とする教育効果が期待され、また、地域貢献事業として口腔保健・高齢者福祉活動の展開を推進し、県民の健康長寿支援に寄与する可能性が認められた。

謝辞

本取り組みを実施するにあたり、ご支援いただいた徳島大学歯学部の方にお礼申し上げます。また、ご協力いただいた実習施設および施設職員の方々に深謝いたします。

参考文献

- 1) Yoneyama T, Yoshida M, Matsui T, Sasaki H: Oral care and pneumonia. Oral Care Working Group. Lancet, 7:354(9177):515, 1999.
- 2) 大岡貴史他：日常的に行う口腔機能訓練による高齢者の口腔機能向上への効果, 口腔衛生会誌, 58, 88-94, 2008.
- 3) 金子正幸他：地域在住高齢者に対する口腔機能向上事業の有効性, 口腔衛生会誌, 59, 26-33, 2009.
- 4) 吉岡昌美他：キャリア形成支援教育プログラムの開発と教育効果の評価ー「チーム医療体験学習」の実践的研究を通してー, 大学教育ジャーナル, 6, 24-43, 2009.
- 5) 高塚人志：いのちを慈しむヒューマン・コミュニケーション授業, 146-156, 大修館書店,

東京, 2007.

- 6) 中村千賀子他：最後の「人間科学基礎 a」を終えて, 東京医科歯科大学人間科学教育課程年報, 9, 225-259, 2004.
- 7) 伊賀弘起他：ー徳島大学パイロット事業支援プログラムー「歯科医療系学生の口腔保健・福祉体験学習による健康長寿支援」の実施報告, 大学教育研究ジャーナル, 6, 108-114, 2009.
- 8) 教育G P 実行部会：高齢社会を担う地域育成型歯学教育, 教育G P 事業報告書, 25-28, 49-62, 徳島印刷センター, 徳島, 2010.
- 9) 日野出大輔・伊賀弘起・中野雅徳・河野文昭・吉本勝彦：教育G P 「高齢社会を担う地域育成型歯学教育」第1報ー高齢者交流学习による教育効果ー, 四国歯学会誌, 22(1), 129-131, 2009.
- 10) Kolb D, Fry R: Towards an applied theory of experiential learning. In: Cooper C L, ed. Theories of Group Process. John Wiley & Sons, London, 33-56, 1975.
- 11) 宮田靖志：生涯学習能力 Significant Event Analysis (SEA)で振り返る, 総合診療医の最前線医療再生を目指す General Physician, Modern Physician, 29, 240-243, 2009.
- 12) 長宗雅美・山田進一・高井恵美・寺嶋吉保：乳幼児との継続交流学习を組み入れた体験型コミュニケーション授業, 大学教育ジャーナル, 7, 94-101, 2010.
- 13) 赤尾勝己：生涯学習理論を学ぶ人のために, 141-169, 世界思想社, 京都, 2004.